

青少年育成事業について

苫小牧市立病院内科

垂水 政人



日本大学卒業。現在卒後4年目です。北海道の佐呂間町の出身です。大学時代の6年間以外は全て北海道で過ごしてきました。北海道大学内科2に入局させていただいて、現在は地方の関連病院で研修中です。

令和元年9月5日に佐呂間町で開催されました青少年育成事業に参加させていただきました。

本事業については、地域の医師不足に対応するため、市町村、北海道および北海道医師会が連携して、中学生等を対象とした講演や地域医療体験学習を実施し、地域医療に対する関心を高め、将来の地域医療を担う人材を育成することを目的として、平成24年度から開催されています。私がこの会に初めて参加したのは平成29年度に置戸中学校で開催された時が初めてで、当時は北見赤十字病院の初期研修医として働いていました。その時のご縁があって、今回私の出身校である佐呂間中学校で青少年育成事業が開催されるとのご連絡をいただきましたので、「ぜひ参加させてください！」と返事をいたしました。

当日の内容としては、北海道医師会会長の長瀬清先生からの講演の後に、先輩医師からのメッセージということで短い時間ですが小生もスピーチをさせていただきました。今回は遠軽厚生病院からも2名の同年代の先生方も参加されており、それぞれスピーチされています。その後は子供たちに5つのコーナーに別れてもらい、順番に回ってもらうという形式です。コーナーは医療器具展示・超音波エコー体験・腹腔鏡機器体験・電子内視鏡体験・AED実演になります。私たち若手医師も各コーナーに別れ、私は内視鏡のコーナーで使用方法や目的について説明を担当させていただきました。初期研修医の時と合わせて2回参加させていただきましたが、中学生の子供たちの反応は新鮮で、純粋に機器に触れることを楽しんでくれたり、担当者の説明に関心をもって聞いてくれる様子があり、自分自身もとても楽しく参加させていただくことができました。

私ごとになりますが、私が医師になりたいと思ったのは中学生の時でした。中学生の時なのでまだ「なんとなく」といった気持ちで将来の夢を考えていた時期ではありましたが、本格的に医師を目指して紆余曲折を経て現在に至ります。将来の展望としては自分の地元に戻って医師として働きたいという希望もあります。そのため、初めてこの会に参加させていただいた時の感動は今でも忘れません。私自身、佐呂間町という小さな町で育ち、将来についてぼんやりと考え出した中学時代にこのような医療体験をさせていただければ、きっと中学生の時からもっと強い気持ちで将来は医師になりたいと考えていたと思います。また佐呂間町のような小さな町では常に医師の確保という問題に晒されています。「医師になりたい」と思い始めてからは、たまたま親が町の役場の職員だったこともあり、役場側がどれだけ医師の確保に尽力しているのかを（内密に）聞いていたので、地元出身の人間が自分の地元に戻ってくることへの期待というものを感ずることが出来ます。やはり都市部と比較すると地方出身の医師数は当然少なくなりますし、北海道のような広い土地で地方の町出身の医師数を考えると、なかなか厳しいものがあるのではないで



しょうか。だからこそこの青少年育成事業を通して、少しでも多くの地方出身の医師が増えることを期待しています。初期研修医時代に医師会の担当の方に「ぜひ自分の出身の佐呂間町でも開催してください」と話したのは今でも忘れられません。今後も末長くこの活動が続いてほしいと思います。

長くなりましたが、この度はこのような貴重なお時間をいただきまして誠にありがとうございました。この青少年育成事業のような会が末長く続くことを願っています。地方の医療のために自分自身、これからもしっかりと学んでいきたいと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

母校での 青少年育成事業を経験して

医療法人北海道家庭医療学センター／
北海道社会事業協会帯広病院 総合診療科
高石 恵一

この度2019年11月11日に北海道医師会の青少年育成事業にて、私の出身地白糠町のしかも母校の中学校で、自らの後輩に対しスピーチと医療体験指導を行う機会を頂戴した。青少年育成事業は市町村・北海道・北海道医師会が連携して2012年から道内各地で行われている。地域の医師不足に対応するため、地域医療を担う人材の育成を目的に行われ、今年度は佐呂間町・稚内市に続いて3ヵ所目の開催である。私は、白糠町立庶路小学校・庶路中学校を卒業しているが、現在両校は生徒数の減少と校舎の老朽化によって統合し、2018年4月に津波などの自然災害に対する備えとして、晴れた日には太平洋・釧路市までも見通せる高台に新築移転され、認定こども園も併設して「白糠町立庶路学園」として生まれ変わった。私が卒業した校舎は新築移転に際してそれぞれ取り壊され、卒業生として大変寂しい複雑な気持ちではあるが、新しくなった母校の体育館で講師として立たせていただいた。中学生の時に本格的に医師を目指したが、夢だった医師として母校に立つことができるとは考えてもみなかったことであり、非常に感慨深い出来事となった。

当日は朝に白糠町役場に出向き、北海道町村会会長を務める白糠町の棚野孝夫町長と懇談を行い、昼には庶路学園に移動して昼食として白糠町の給食を10数年ぶりに頂いた。今回私自身白糠町の給食を食べることを大変楽しみにしていたのだが、当日はちょうどふるさと給食（地元の食材をふんだんに使う給食）週間で、白糠町産の柳だこを使ったカレーと、同じく白糠町産のブルーベリーを使用したヨーグルトで、両者大変おいしくいただいた。



午後からは庶路学園体育館で、長瀬北海道医師会会長の講演の後に、庶路学園の7年生・8年生（中学1年生・2年生）30人程度に5～10分程度の自己紹介・医師を目指したきっかけ・メッセージ等をお話した。その中で最も伝えたかったことは、医師という職業のやりがいや責任感の大きさについて、そして夢や人生の目標を持つことの大切さである。患者さんに感謝されたり患者さんが元気になっていくことは大変嬉しく大きなやりがいにつながるが、一方で医師の一言は患者・家族の人生を左右することもあるし、医師が電子カルテ上で誤ったワンクリック（間違っただけで違う薬剤をオーダーすること）が患者さんを最悪死なせてしまう可能性もあるという恐ろしさ等の具体例を出しながら、医師の仕事の責任感の大きさを伝えた。そして私自身がそうだったように、早いうちから職業などの夢を持ち、目標に向かって努力することが大切で、夢の実現の可能性につながることも話した。

年齢が比較的近い医師からの話は印象的だったようで、中学生からは好評だった旨のアンケートが返ってきた。

その後は、「医療体験学習」として、中学生に内視鏡（下部消化管内視鏡）、術衣試着、腹部エコー、腹腔鏡、眼科検査体験を、ブースを回り行ってもらった。私は内視鏡コーナーを担当したが、内視鏡は1つあたり600万円ほどするということや、普通ならば医師しか操作することができないものなどということなども話しながら、中学生に指導を行った。体験では下行結腸に挿入している内視鏡をなるべく練習模型の腸壁に当たらないように進めたり抜いたりしてもらった。学生はゲーム世代真ただ中であり、up-downを器用に操作しながら比較的上手に行える学生も多かった。全学生がすべてのブースを回り切ったところで終了となった。普段ドラマや病院で見ることしかない機器に、中学生が目を輝かせていたのが印象的だった。

今回地元の中学生を相手にスピーチや医療体験学習の指導を行ったが、私自身がこの地で中学生の時代を過ごし、医師を本気で志した時の初心に返ることができる貴重なひとときにもなった。また自身が中学生の時にも、このような若手医師の話を聞いたり医療機器体験ができる機会があれば、当時の高石少年はどれだけ目を輝かせたことだろうかと想像していた。この青少年育成事業は、今回の「夢を育てよう」というテーマどおりの大変素晴らしい事業であり、今後も道内の小中学生に夢を与えるため、未永く続いてほしいと考えている。また今回事業を行った母校の中学生の中から1人でも医療者、特に医師を目指してくれる方が出てくれれば嬉しい。

私自身は地域枠出身の医師として、北海道民の皆様の税金で医師となった立場である。今後も未来の医療者となりうる人材育成のために開催される、同様な事業が開催される際には積極的に協力していきたいと切に思う。



北海道白糠町出身。札幌医科大学地域枠1期生で医師6年目です。医療法人北海道家庭医療学センターに所属し、家庭医療専攻医をしています。妻と娘2人の4人家族で、好きな食べ物はラーメンです。将来は道内の診療所で地域医療に従事したいと考えています。



地域医療を担う青少年育成事業

地域の医師不足に対応するため、開催地市町村・教育委員会・北海道・北海道医師会が共催として連携し、小・中学生を対象とする医療体験事業等を平成24年度から毎年実施。将来、本道の地域医療を担う人材を育成することを目的としています。

【一部】小中学生対象

○講演「夢を育てよう」～北海道医師会会長 長瀬 清 ○講演「地元医師スピーチ」～地元出身医師等

○医療体験 術衣試着、医療器具体験、AED実演、医療検査機器、エコー、内視鏡カメラ挿入、

腹腔鏡手術シミュレーター体験、視力測定体験



【二部】保護者、地域住民対象

○講演「地域の医療を考える」～北海道医師会会長 長瀬 清



地域医療を担う青少年育成事業の実施状況について

